

## 住民協働による文化財の保護、情報発信

**【取組の概要】“まちじゅう”の人たちと都市遺産がつながり、  
“おもてなし”をするまちづくり、観光文化都市づくり**

萩のまちは、まちじゅうに豊かな自然や古い町並みなどの都市遺産が数多く残り、「江戸時代の地図がそのまま使える町」とも呼ばれ、多くの人に愛されている。

戦後の高度成長期、都市遺産である美しい町並みが、都市の再開発などによって全国各地で失われていった。萩市では、そうした時代の荒波に流されることなく、まちじゅうに残る土塀や武家屋敷など美しい古い町並みを自分たちのまちの都市遺産として保存する取組を早くから行ってきた。1972年に全国に先駆けて市独自の「歴史的景観保存条例」を制定し、1976年に萩市の2地区が全国では最初となる「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されるなど、名実ともに日本を代表する町並み保存の先進地となっている。

しかし、「土塀から顔を出す夏みかん」、「古い町家が続く町並み」、「萩の歴史を見守ってきた松の古木」といった萩のまちを象徴する美しい風景も、最近になって都市化の波で徐々に失われるようになってきた。こうしたなか、萩市では、まちじゅうを“屋根のない博物館”としてとらえ、歴史的・文化的遺産を市民と行政が一体となって大切に保存・活用していこうと、新たなまちづくり「萩まちじゅう博物館」に取り組み始めた。

萩にしかない“宝もの”を次世代にきちんと伝え、「萩に住んで良かった」と感じられるような魅力あるまちづくりに取り組み、萩を訪れた人々にも萩のすばらしさを愛着と誇りを持って伝えることで、萩を「心のふるさと」と思ってもらえるような、そんな“おもてなし”を推進しようと、「萩まちじゅう博物館」という新たなまちづくりに取り組んでいるのである。

### 1. 先進的な町並み保全活動と観光地としての発展

#### 「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」

萩のまちは、関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元<sup>もうりてるもと</sup>が1604年に萩に城を構えたことにより、長州藩36万石の城下町としてまちが形成され、今も当時の町割りや道筋がそのままの姿となっていて残っている。萩城は日本海を背に築かれ、まちは松本川、橋本川という2つの川が作った三角州の上に造られた。毛利藩政時代、まちの中心部は低地であったため遊水地として利用されていたが、明治時代になって、その遊水地であった場所に、新しい官公庁など

が整備された。また、国道の一つは江戸時代からの街道を拡幅し整備しただけで、ほとんど江戸時代からのまちの姿を変えることがなかった。鉄道網の整備時には、昔から町並みを守ろうとする意識が高かった城下町の住民が、鉄道を三角州の中に入れることに強く反対したため、城下町を迂回する形で敷設された。

更に、萩のまちは昔から水害に悩まされてきたものの、幸運なことに震災や戦災には遭わず、また町並みを大きく消失するような大火も無かった。時代は高度経済成長期となり、全国的に産業用地や住宅地の開発が進み、各地の歴史的町並みが次々と姿を消していくなかで、萩市では1960年代に町並み保存運動が展開され、1972年に全国で初めての「歴史的景観保存条例」を制定した。また、その4年後の1976年には、城下町にある堀内と平安古の2地区が、国の「重要伝統的建造物群保存地区」の指定を初めて受け、2001年には浜崎地区も指定された。現在4地区目の指定に向けて活動中であるが、4地区になれば日本の古都の代表格である京都と件数で並ぶこととなる。更には現在、世界遺産（近代化遺産）の暫定リストにも登録されており、本登録を目指している。

まるで江戸時代にタイムスリップしたような萩のまちを、市では市民運動と法制度の適用で守り支えてきた。萩のまちは、江戸時代の地図が現在でもそのまま使えるほどに、江戸時代の姿が残っている。市の担当職員によれば、町並みが残ったのにはこの他にも次のような理由があるという。例えば、地域を力強く牽引するような高成長の産業があまりなく、経済力が弱かったため家屋の建て替えが進まなかった。また、次に述べるとおり、萩のまちは、明治以降は「夏みかん」とともに発展してきたということも、理由の一つとしてあげられる。

## 明治からのまちのシンボル「夏みかん」が町並みを守った

萩は、幕末・維新の時代に吉田松陰、木戸孝允、高杉晋作、伊藤博文など時代を動かした重要な人物が育ったまちとして知られているが、幕末、藩庁はより交通の便に恵まれた山陽道に位置する山口へ移ることとなった。萩は新時代の幕開けを先導してきたまちでありながら、その幕開けと同時に時代の流れから取り残され、その後、歴史性を色濃く残しながら独自のまちづくりを進めていくことになる。

明治になって、新政府の体制下で身分も職も失った士族の反感が高まると、各地で反乱が起こった。萩でも、明治維新の立役者であった奇兵隊への解散命令や、士族が職を失ったことなどから不満が高まり、1876年、「萩の乱」が起こった。

新しい時代になった後の萩に残ったものは、失業した武士階級と広大な武家屋敷だった。萩藩の家臣だった小幡高政は自身の屋敷の庭に夏みかんを植えて、もと士族らが夏みかんの栽培で生活できるように増産に励んだ。夏みかんの栽培は、あまり手がかからず、農作業に不慣れな士族出身者には向いていた。自宅に植え付けた夏みかんの苗は成長し、小幡はこれを他の士族たちに分け与えて、屋敷や空き地に植えることを勧めていった。次第に、各士族らの屋敷の庭に、空き地にと増え、やがて夏みかんはまちじゅうを埋め尽くすほど

になった。

夏みかんの樹が数本あれば子どもを上級の学校に行かせることができると言われるほど、夏みかんは高額で取り引きされた。萩は日本海に面しており、冬には北西の季節風が吹きつけるが、武家屋敷に残る白壁や土塀が風に弱い夏みかんを守り、暖流の影響による温暖な気候も栽培に適していたため、まちじゅうに夏みかん畑が広がっていった。

昭和の30年代までは、夏みかんの栽培は萩の主要な産業であり、白壁や土塀と夏みかんの色のコントラストは美しく、城下町の美しい景観に馴染んだ。萩の三角州に夏みかん畑が広がったことにより、宅地分譲などが進まず景観を維持してきたとも言われている。

しかし、昭和40年代に入ると、夏みかんの栽培の中心が郊外に移り、宅地分譲が進行。また、夏みかん以外のかんきつ類が海外から大量に移入されるようになるなど、次第に萩のまちから夏みかん畑が消えていった。こうした経過をたどりつつも、今でも土塀や白壁から顔を出す夏みかんは、萩のまちと共に歩んできたまちのシンボルとして来訪者を和ませている。

山口県内の県道を走ると、全国にはない黄色いガードレールに出会う。ガードレールでさえ夏みかんの色をしているのである。

## 萩の観光地としての盛衰

萩の観光客のピークは1975年頃で、当時は旧国鉄がディスカバージャパン・キャンペーンを展開、博多まで新幹線が開通したことで西に向かう旅を提案し、「いい日旅立ち」が駅で流れた。また、若い女性向けの雑誌「アンアン」や「ノンノ」は全国の小京都と言われるまちを紹介し、自転車に乗ってまちを巡る旅を提案した。それらにより萩の観光客は一気に増え、それまでは情緒豊かな静かな観光地だった萩が、アンノン族（「アンアン」「ノンノ」の読者の若い女性たち）が行きかう全国区の有名観光地の仲間入りをした。最盛期の1975年には、山陽新幹線の開通に合わせて年間225万人が訪れた。この頃、萩には宿泊施設がまだ少なく、泊まれない観光客が仕方なく寺のお堂に泊めてもらったという話もある。これをきっかけに、萩にはホテルや民宿が急増し、同時に萩焼の窯も増えた。最盛期に比べると観光客数は減ったが、日本を代表する観光地として、現在も年間160万人前後の観光客が訪れている。

その一方で、かつて萩の観光客の一翼を担っていた修学旅行が激減していった。それまでの中国地域への修学旅行は、広島から萩へというコースが多かったが、少子化の影響に加えて、国内外に新しい修学旅行スポットが次々と現れるなど、各地の修学旅行の誘致合戦が激化したことが影響している。また、萩の特徴として、幕末や明治維新に関わる史跡が多いが、教科書からその時代のページが減ったことも影響して、修学旅行が減ったのではないかと市や観光業者などの関係者は考えている。萩に来る修学旅行生の行動も変化した。昔の修学旅行といえば大部屋で枕投げが定番であったが、近年、修学旅行生は大部屋を嫌がるようになった。萩市内のホテルの多くは、その造りが修学旅行向けの大部屋にな

っていたが、現在は個人旅行に対応できるよう改修を進めている。また、自転車により史跡を巡ることも交通事故など危険を伴うことから、学校関係者から敬遠されつつある。

修学旅行に替わって、近年菰に増えてきたのが熟年夫婦などの個人旅行である。また、団塊世代の人たちの来訪も増えている。

菰観光の現在の大きな課題は、市内での滞在時間が短く、通過型の観光地になりつつあることであり、宿泊客に比べ、日帰りの場合は菰で使われる金額が少なくなっている。菰に温泉はあるが、まだ知名度が低く、昼間菰を訪れた観光客は西日本でも有数の温泉地である湯本温泉や湯田温泉等に宿泊してしまうのである。

菰では豊かな自然の恵みを活用した地産地消にも取り組んでいる。菰沖は日本海でも有数の好漁場であり、また、他の海に比べて魚の種類が非常に豊富なことも特徴的である。更に、和牛の祖である見島牛<sup>みしまうし</sup>の血を引く見蘭牛<sup>けんらんぎゅう</sup>という特産牛もある。このような食文化なども全国に紹介し、観光客の滞在時間を延ばすことによって、なるべく多くの消費を菰でしてもらい、できれば宿泊してもらおうということを目指している。

## 2. 「菰まちじゅう博物館」による新たなまちづくり、観光地づくり

### 「菰まちじゅう博物館」のきっかけ

先人が残した菰の町並みは貴重な都市遺産であり、世界的な遺産である。そうしたまちの「宝もの」である町並みや文化財などを保存・活用し、“まちじゅう”を屋根のない博物館ととらえてまちづくりや観光地づくりを行っていく取組、「菰に住んで良かった」と住民が実感でき、“もてなし”の体制が整った観光地づくりをめざす取組が、「菰まちじゅう博物館」である。

「菰まちじゅう博物館」を進めるきっかけとなったのが、国土交通省の補助事業「まちづくり総合支援事業（現：まちづくり交付金事業）」である。計画当初の2002年、市の都市計画課ではそれを使って、歩道の整備、電柱の地中化、広場の整備などのハード事業を行う予定であった。しかし、この事業に市長からのストップがかかった。「歩道の整備、電柱の地中化など、まち全体のことを考えるのは、都市計画課という一つの課で考えることではない。また、行政だけでやることでもない。市のまちづくりとしてやるなら、市民に参加してもらわなくてはならない」、というのが市長の考えだった。

市の総合的なまちづくりとして実施するために、担当課は都市計画課から企画課に移された。まちづくりは、行政の中の課ごとでやっていた方がいいものがない、縦割りは止めようということで、企画課を中心に体制を作ることになった。同時に、これからは市民の参画も交えて横の連携を密にして、「まちじゅう博物館」として、一致団結していこうということになった。「まちじゅう博物館」というのは、2003年11月に菰でまちづくりシンポジウムを開催した時に初めて全国発信した言葉だったが、以前から「菰はまちじゅうが博物館のようですね」と言われていた。その後、「まちじゅう博物館」の理念を中心にまち

づくりを進めていくことになった。

## 市民参加で構想づくり

2003年6月、地元の代表者と、商工会議所や観光協会、学識経験者など30名による、「まちじゅう博物館整備検討委員会」が設置された。委員会は、市外からの専門家も交えて構成され、そのもとに4つの部会が置かれた。部会は、まちづくり総合支援事業における整備対象地区である「堀内地区」、「<sup>あいばかわ</sup>藍場川地区」、「浜崎地区」、「旧松本村地区」の4地区それぞれを担当し、メンバーには、各地区に住んでいて、まちづくりに熱心な市民が参加した。

「堀内地区」は萩城や上級武士の屋敷があった地区、「藍場川地区」は水路を屋敷の中に引き込み生活用水として利用し、水に親しむ文化を持つ地区、「浜崎地区」は古くは北前船が寄港した商家が軒を連ねる地区、「旧松本村地区」は<sup>よしだしょういん</sup>吉田松陰の生誕地や<sup>しょうかそんじゅく</sup>松下村塾があった地区、といったように、城下町の中でもそれぞれに特徴を持った地区で、地区の保全のためにこれからの整備が急がれる地区だった。



萩の町並み（左：城下町、中央：浜崎地区、右：藍場川地区）

各部会では、これからの萩のまちづくりに関して委員から様々な意見が出された。特に委員から多く出された意見は、道路のカラー舗装についてだった。過去に市が実施したカラー舗装は、「色が良くない」、「町並みと合っていない」と評価が低かった。このため、市は自然の砂利などを混ぜる「自然色舗装」に変更した。

様々な意見交換が更に進むなかで、まちづくりを推進するためのNPO法人を立ち上げようという構想が出てきた。まちづくりには市民の力が必要だ、行政だけではない、市民がまちづくりに参加できる仕組みとしてNPO法人を立ち上げてはどうか、ということになった。

2004年は萩市にとって、1604年に毛利輝元が入城して400年目という節目に当たっていた。同年11月には、「萩博物館」の開館が決まっていた。萩市が整備した萩博物館は、敷地面積14,447㎡、収蔵品総数18万7,000点、総事業費31億4,100万円で、萩の自然や歴史、民俗、文化などあらゆることが学べる機能を持つ本格的な施設だった。この博物館を

「まちじゅう博物館」の拠点として位置づけ、NPO法人と行政の協働で運営を行ってはどうか、という案が浮上した。

このような議論がきっかけとなって、後にNPO法人が立ち上がるとともに、地元住民の活動も活発化していった。



萩博物館

## 萩博物館をNPOの拠点に

2003年当時の萩市にはNPO法人はまだわずかしかなかく、NPO（法人）という概念を知っていても、市民も行政もまだ馴染みがありませんでした。そうしたことから、萩市内では、「まちじゅう博物館」の一環としてNPO法人を立ち上げようという意識を持った個人もグループもほとんど見当たらなかった。そのため、市では、中心的な役割を果たしてくれそうな数人に声をかけ、その人たちに全面的に協力する形でNPO法人の設立を支援し、将来的には市職員の支援がなくても運営ができるNPO法人を目指すことにした。2004年6月にNPO法人の設立総会を開き、同年9月に「NPO法人萩まちじゅう博物館」として県から設立認証を得て、活動を本格的にスタートさせた。

「NPO法人萩まちじゅう博物館」（以下、NPO法人）の設立とその活動展開に当たっては、様々な形で市民の協力を得ながら進めていった。NPO法人の理事長は、「まちじゅう博物館」の館長（全国公募の結果大分県出身の元テレビ局関係者）が兼務することとなった。NPO法人の理事は理事長を含め3名で、まちじゅう博物館長、市内で斬新な経営で話題となっている道の駅の駅長、個人的な立場の萩市職員が就任した。NPO法人の事務局は「萩博物館」に設置された。

2004年11月の「萩博物館」の開館に合わせて、NPO法人の本格的な活動も始まった。NPO法人は萩博物館の運営に関わる業務のうち、案内、受付、ガイド、守衛、清掃及び、レストランとショップの経営を担当する。スタッフとなる会員を市報で募り、説明会を開催して会員にどのような業務を担当したいかを尋ねた。すると、レストランやショップを担当したいという女性の希望者が多かった。事務局としては当初、レストランやショップの経営については専門事業者に委託することを考えていたが、NPO法人の中に希望者がいるのならということで、レストランとショップを希望者で立ち上げることにした。このレストランとショップの経営をNPO法人で引き受けたことが、後になって功を奏した。

レストランのメニューについても、「萩らしいメニュー」を市民に公募し、夏みかんソフトクリーム、見蘭牛を使ったローストビーフ丼、萩沖で獲れた旬の魚の刺身を乗せた萩三旬<sup>はぎさんしゅん</sup>丼などの地産地消メニューを揃えた。スタッフは、料理は好きでも飲食業の経験者ではなかったため、開業当初は調理に時間がかかるなど、様々な問題が発生し、事務局をはらはらさせた。しかし、苦勞を重ねながら一つひとつ問題点が改善されると、売上は順調に伸びて、観光客だけでなく近隣の人も多く利用するようになった。レストランとショップの売上はそれぞれ年間約2,000万円で、約400万円の黒字を出している。この黒字が、

NPO法人の活動範囲を広げていく原資となった。

## 広がるNPOの活動

NPO法人の現在（2008年11月）の役員は、理事長含む理事が8名、監事が2名となっている。現理事長は2代目で、観光関連事業に携わった実績を持ち、萩市内のホテルの再生にも関わってきた、いわゆる「もてなし」のプロでもある。また、会員は153名、事務局5名（事務局長1名、職員4名）で運営している。NPO法人は組織の中に様々な班を設けており、会員はそれぞれ希望する班に所属して活動する。現在の班は、「ガイド班」、「守衛・清掃班」、「受付・ショップ班」、「レストラン班」、「まち博推進班」、「花と緑の推進班」、「情報発信班」、「民話語り部班」、「研修班」、「外国語班」、「イベント班」、「学芸サポート班（海洋・民俗・歴史・陸上生物・天文）」、以上12班からなっている。設立当初は20名ほどでスタートしたNPO法人であったが、今では150名を超える会員を擁しており、今もNPO法人に参加・活動したいという人は増えているという。

## 広がりを見せる住民・NPO・行政の連携

この12班の中で「まち博推進班」では、学芸員のサポートを受けながら、志士の墓の調査や、筋名（通りの名前：昔はどんな小さな通りにも名前がついており、その言われがあった）の復活に向けての調査などを行っている。萩のまちの筋名には、様々な言われがある。例えば、毛利輝元のある家臣が殉死した際、その家臣がかわいがっていた猫が四九日に主人の後を追って墓の前で死んだ。それから、その家臣の屋敷の前を通ると、主人を呼ぶ猫の鳴き声がすると伝わることから、その筋に「猫町」の名が付いたという。

この筋名の復活は、前述の「まちじゅう博物館整備検討委員会」の堀内部会から提唱があったものである。地元ではもう名前も言われも分からなくなったものもあり、「まち博推進班」の会員が調査に当たっている。この調査結果を受けて、放置すれば廃れていく歴史や文化を復活しようという市の施策の一つとして、萩市が筋名のプレートを道路に埋め込むなどしている。また、地区によっては、地元住民が筋名をまちの中に独自に看板をつくって表示しようというところも出てきた。市民のアイデアで始まった筋名復活を始めとして、NPO、行政、その他様々な人や組織が連携しながら、萩のまちの歴史・文化を継承しようという活動が活発化している。

このほかNPO法人では、市や文化財保護団体と連携して、文化財に未指定である市民の「宝もの」のために、「ワンコイントラスト運動」を展開している。市内3か所の公共施設には「ワンコイントラストボックス」を設置し、観光客や市民からワンコイン（100円）の信託金を募っている。NPO法人が集金し、市が管理を、文化財保護団体が広報を担当している。

この信託金によって、鉄道の父・井上勝の旧宅門がトラスト物件の第1号として修復された。井上勝は幕末に英国で鉄道について学び、明治政府では鉄道庁長官として日本鉄道事業に尽力した人物である。井上勝旧宅の門の修復は、様々な議論が起こり、私財である門に対して税金を財源とする修復ができずにいた。そこで、ワンコイントラストの信託金を使って修復することとなり、現在、トラスト物件は第5号まで修復を完了している。



ワンコイントラストボックスと、トラスト物件第1号の井上勝旧宅門（左：修復前、右：修復後）

## 盛り上がる各地区の活動をまち全体のエネルギーに

「まちじゅう博物館構想」をきっかけに、市民の意識が徐々に変わり、自分たちのまちを見つめ直し、守り、活性化させようという動きが増えていき、具体的に目的を掲げて活動を展開する団体もたくさん出て来るようになった。ある地区で地元住民が地区を紹介する本を出すと、別の地区で「こちらも出そう」という話が盛り上がり、地区に残る古い商家を活用したレストランやショップを地元住民で運営したいと、夜な夜な会議をし、NPO法人に相談を持ちかけてくる地区も出てきた。

「萩博物館」の開館に合わせNPO法人を設立した当時からは考えられないほどに、市内では新しいNPO法人が増えてきた。新たに立ち上がるNPO法人の活動分野も多彩になり、音楽などのこれまでになかった分野の活動も増えてきた。

NPO法人では、民間の中核的存在として、市内の様々な団体・グループとの議論や交流を進めてきた。2代目理事長は、「まちじゅう博物館と聞いて最初はすばらしい構想だと思ったが、いざ具体的に何をするかというとなかなか難しい」と話す。具体像はどういうものなのか、といった根本的なところから、多くの人たちと繰り返し議論をしてきた。理事長には、いろいろな組織をまとめるという大役がのしかかり、各地区の活動が活発化すればするほど地区同士の意見が食い違ってくることもある。しかし、ぶつかり合いながらも前進していると、理事長は話す。それは、ぶつかりはしても、まちじゅう博物館をどうするかという核がしっかりしているからだという。

## 観光客をもてなして、滞在時間を延ばす

萩には、維新の志士などの生家、旧宅、別邸などのゆかりの建物が往時のままで多く残っており、魅力的な観光スポットとなっている。しかし、以前は人が住んでいたため、観光客が中に入って見ることができず、外観を眺めるだけで終わっていた。城下町といっても城は残っておらず、旧宅があっても外から見るだけだったこともあり、観光客の滞在時間がどうしても短くなりがちなのが長年の課題だった。

萩市では、この課題を克服しようと様々な取組を行ない、最近では少しずつ滞在時間を延ばすことに成功するようになってきている。市の所有する旧宅などは公開し、観光客が家の中まで入れるようになった。しかし、家の中には維新の志士たちが使った家具や備品は、ほとんど何も残っていない状態になっていた。幕末から明治維新に活躍した志士たちは、当時東京に移り住む時に全部一緒に持って行ってしまったからである。これでは家の中をざっと見ただけで終わってしまう。

志士ゆかりの建物の中での説明が、ただ誰がいつからいつまで住んでいたとただただだと、志士たちの生活の様子が伝わらないが、市民ガイドが語り部となって、往時のエピソードなどを話すと観光客のイメージが膨らんでくる。例えば、「高杉晋作は2つ向こうの筋に家があって、小さい頃はその向こうのお寺にある天狗で、度胸試しをしていたんですよ」、「高杉晋作は両親が厳しくて、吉田松陰みたいな人と会ってはいけないと叱られたんです。そこで、ここから夜な夜な松下村塾まで通って、家の近くまで帰ってきたら、そこでお酒を飲んで、家に帰って『どこに行ってた』と聞かれたら、『友人とお酒を飲んできた』と答えていたらしいですよ」。そうした話を聞くと、家の中にすでにゆかりの品々がなくても、高杉晋作の生活がイメージできる。そうした話ができる人を語り部として、養成していくことになった。

市は、観光ガイドの養成と建物の管理を一緒に行う体制を整えることにした。2007年5月、萩観光ガイド協会がNPOの法人格を取得し、それまで複数あったガイドを行う小さい組織を一つに束ね、文化財施設をばらばらに管理していた状態を改善して一元管理するようにしていった。

## 物知り博士が「まちかど解説員」に

萩の市民自身があらためて地元の萩について勉強するきっかけにしようと、現在では全国でブームとなっているご当地検定を萩市では2005年にいち早く取り入れた。萩市の「萩ものしり博士検定」は、「修士課程」と「博士課程」に分かれる。博士課程は、選択式ではなく、人名や解説を記述して解答するため難しく、漢字を間違えるケースも多く、合格率は20%と低い。合格者の中には、合格のためにボールペンを3本もつぶしたという人もおり、難易度は非常に高かった。

市は、市民の人たちのこのような努力を萩市のために役立ててもらおうと考え、博士課

程に合格した“ものしり博士”には、「まちかど解説員」を委嘱することにした。まちかど解説員は、検定で勉強して知った萩の歴史や文化を市民に話したり、観光客が迷っていたら声をかけてあげたりと、様々な形で活躍している。

また、ものしり博士のなかには、萩観光ガイド協会や萩博物館のガイドになった人もいる。それまで観光ガイドの数は設立当初に一時的に増えたが、最近伸び悩んでいた。市では養成講座として観光セミナーを開講しているが、年間に数名しかガイドになる人がいなかったため、現在はものしり博士にガイドとして活躍してもらおうとの期待が高まっている。2008年度には、山口県内でJR西日本のディスティネーションキャンペーンが開催され、萩では毎週日曜日に旧久保田家住宅において、萩ものしり博士が自分の得意分野を20～30分講義をしてもらって「おもしろ講座」を開講して好評を博した。

更に、萩のことを勉強できる子ども向けの「萩ものしりブック」という冊子も作成した。地元の企業に出資してもらい、「吉田松陰とその塾生たち」という本を出版し、その利益で冊子を作り、市内の小学5・6年生全員に配布した。「萩ものしりブック」には萩の自慢話がたくさん収められている。

### 3. 「萩まちじゅう博物館」のこれから

#### **市民の力でまちを守り、まちを創る**

2007年度の萩市への観光入込客数は160万人となり、観光客の減少は底を打ったと観光協会が発表した。その背景には、市民参加で市内のいろいろな地区でまちおこしが起こったことや、市やワンコイントラストによる文化財施設などの復元・修復、周辺部の整備などが進んだことがあげられる。また、市民ガイドの体制が整い、検定などによってガイドの裾野が広がってきたことなどもあげられる。そうした様々な取組の結果、観光客の滞在時間が少しずつ長くなっているのではないかと考えられている。

NPO法人については、これまでの市の全面的な協力による運営から、市民主導の自律的な運営に移していくことが課題となっている。各地区ではこれまで様々な形で活動が展開され、その気運も盛り上がり、少しずつ成果を発揮するようになってきている。そうした各地区各分野の活動を「まちじゅう博物館」としてまとめることができれば、大きな力になる。萩市では、市民の大きな動きを、行政が前に出るのではなく、後ろから支える、という体制を目指している。また、合併して萩市となった旧町村地域でも、このまちづくりを広げていきたいと考えている。

「萩まちじゅう博物館」のネットワークのイメージ図（資料：萩市）

